

---

# ドラマチック受精

土壇牙ゐバイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドラマチック受精

### 【Nコード】

N5186P

### 【作者名】

土壇牙ゐバイ

### 【あらすじ】

地獄のような場所を走り続ける者達。彼らが目指しているのは・・

## 第一部

R指定

(文中に性的な表現が含まれておりますのでご注意下さい)

ネ・・・ネボスケ

長・・・長老

若・・・若頭

鶴・・・鶴亀

・・・はっ！

こゝここはどこだろう・・・？

・・・あれ？

ぼ、僕は・・・・・・・・僕は誰なんだ？

そして・・・・・・・・僕はなぜ走っているのだろう・・・・・・・・？

うおおおおお！熱い！！・・・身体が焼けるように熱い！

いったいどうなっているんだ？！

長 「ようやくお目覚めじゃな、ネボスケ。」

隣で併走していた老人が話しかけてくる。

ネ 「あ、あなたは？」

長 「わしか？わしは、おぬしを導く者じゃ。」

ネ 「導く・・・？僕を？どこに？」

長 「ふっふっふ。」

ネ 「ハアハア、それより何なんですか、この熱さは？それに僕らはなぜ走っているんですか？！」

長 「おーっと、決して足を止めてはならんぞ。」

ネ 「ハアハア、そう言われましても、身体が溶けるようなこの熱さ、とても走ってなんかいられませんよ。」

長 「まわりを見てみい。」

ネ 「え？」

長 「ほれ、実際に溶けている者もおるじゃろ。」

周囲を見渡すと、そこには自分と同じ姿をした者たちが無数にうごめいていた。ある者は「助けてー！」と泣き叫び、またある者は「死にたくないー！」と命乞いをしていた。そして足を止めて休んだ者は一瞬にして身体を業火に焼かれ、溶けていつていた。それはまさに、混沌と阿鼻叫喚の地獄絵図であった。

ネ 「ハアハア、どうなってるんだ・・・！？僕は地獄に来てしまったのか・・・？！」

長 「地獄か。なるほど。確かに地獄と言えなくもない。ふっふっ

ふ。」

ネ 「ハアハア、それにしてもおじいさん。あなたはこんな状況下なのに、随分余裕な顔をされてますね……。信じられない。」

長 「そうかの？まあ、まだ始まったばかりだしのう。」

ネ 「ハアハア、始まったばかり？」

長 「それとわしは、みなから『長老』と呼ばれておる。以後、おぬしもそう呼びなされ。」

ネ 「ハアハア、長老ですか。」

長 「みな、わしを年寄り扱いするでな。」

ネ 「ハアハア、あのう、長老、一つ気になることがあるんです。」

長 「なんぞ？」

ネ 「ハアハア、他人のあなたにこんなことを聞くのはおかしい話ですが……。ハアハア……。僕は、誰なんですか？」

長 「ふっふっふ。」

ネ 「誰なんですか、僕は？！」

長 「もうまもなくじゃ。」

ネ 「え？」

長 「まもなく、おぬしは自分が何者であるか、そして自分の宿命を悟ることになるう。」

ネ 「ハアハア、知ることになるって言われたって……。う、うわー！ー！！」

長老にそう言われた次の瞬間、目の前が真っ白になり、僕の頭に強烈な痛みが走った。その痛みを例えて言うなら、そう、落雷を脳天にくらったようなそんな強烈なインパクトであった。

ネ 「あ、頭が割れるうううー！！！」

長 「落ち着け。大丈夫じゃ、死にやせん。足を止めるでないぞ。」

ネ 「ハアハア・・・ハアハア、な、なんだったんですか、今は？！」

長 「『覚醒現象』じゃ。」

ネ 「覚醒・・・現象？」

長 「どうじゃ？自分が何者であるか、わかったじゃろ？」

ネ 「は？そんな、まさか。」

長 「もう一度ゆっくり考えてみるんじゃ。」

僕は半信半疑ながらも、自分が何者であるかをもう一度考えてみることにした。すると！

ネ 「あれ？！なんだこれ！わかる！わかります！自分が何者なのか、そして自分が何をすべきか！見える！！わはっ！すごい！」

某年12月24日の夜、ある男とある女がとあるベッドの上で『メイクラブ』を行っていた。そのメイクラブが佳境に入り、男が『女の中』で『フィニッシュ』を迎えた瞬間、僕の人生は『スタート』した。そう、僕はその際に放出された約二億四千万匹の『セイシ』の内の一匹だったのだ。

長 「我々セイシのDNA に組み込まれている『本能』により、先ほどのような覚醒現象が引き起こされ、我々は瞬時に自らの宿命を悟るのじゃ。」

ネ 「そうなのですか。・・・不思議なものですね。」

長 「どうじゃ？人生の目的がわかった瞬間に幾分か『チカラ』が湧いてきやせんか？」

ネ 「そういえば、さつきはあんなに息切れしていたのに、あまり苦しくない!」

長 「そう、それがモチベーションという名のチカラじゃよ。」

ネ 「目的意識が僕らセイシを強くするんですね。ですが、この熱さはやはり耐え難いものがあります……。これが女性の『あの中』だというのは信じられません。」

長 「我々はこのことを『シーワールド』と呼んでおる。」

ネ 「シーワールド……。」

長 「シーワールドは我々セイシにとって試練の場じゃ。まあ先ほどおぬしも言っておったが、地獄と呼ぶ者もおるでな。」

ネ 「地獄って、人間が死んでから行く場所だと思っただけですが、人間が生まれる前に通る場所だったんですね。」

長 「うむ。うまいことを言うのう、おぬし。」

シーワールド・試練の道。それは僕らセイシにとって途方もなく長い道のりであった。例えて言うなら、アリンコが万里の長城を歩き続けるが如く、である。覚醒現象により、一時的に息を吹き返した自分も徐々にその体力を奪われ、限界を迎えようとしていた。

ネ 「長老、いったいこの道はどれだけ続くんですか？」

長 「さあなのう。」

ネ 「僕、もうだめです。」

長 「しっかりせい。ゴールは必ずあるんじやから。」

ネ 「そんなこと言われても、身体が言うことをきいてくれないんです……。」

長 「立ち止まったら死ぬぞい。」

ネ 「どうして?!」

長 「ほ?」

ネ 「どうして、僕らはこんな目に遭わなければならないんですか？！」

長 「どうしてと言われても、のう。」

ネ 「地獄って悪いことをした人間が行くところでしょ？僕らが何したって言うんですか？」

若 「ケツ！さっきから聞いてりや、甘っちょろいことばつかぬかしやがって。」

ネ 「だ、誰だ？」

二匹の会話に突然入り込んできた一匹のセイシ。

若 「おい、その貴様、ここが地獄だって言うのか？」

ネ 「と、当然でしょ！だって、この熱さ、そしてこの長さ。まわりのセイシ達がつめき声を残して次々と死んでいくこの光景。これを地獄と言わずして、何を地獄と言うんですか？！」

若 「それが甘え<sup>あめ</sup>って言うてんだよ。貴様、セイシ達がたどる様々な悲劇の運命を承知してないとは言わせねえぞ？」

ネ 「ど、どういことだ？」

若 「ふん。一度しか言わねえから、耳の穴かっぱじってよく聞いとけよ。」

ネ 「くっ！！」

若 「オレらセイシのほとんどは、『外』で放出されて朽ち果て、また『ゴム』の中で放出されて朽ち果て、あるいは『ティッシュ』の上に放出されて朽ち果てる運命にあるんだよ！」

ネ 「！！」

長 「まあ、『口の中』に放出されて朽ち果てるセイシもおるがのう。」

若 「……とにかくだ！無数の諸先輩方がその儚い人生を一瞬で終えていった中、オレらは幸運にも『この中』で放出され、今まさにこのシーワールドで目的に向かってこの命を燃やせているん



だ！」

ネ「！！！」

若「セイシがここに到達できる可能性たるや、天文学的確率の低さだ！幸運中の幸運。まさに奇跡と呼ぶにふさわしい。」

ネ「奇跡……。」

若「つまり、ここは地獄なんかじゃねえ。ここは『天国』なのさ！！！」

ネ「はっ！！！」

長「そうじゃのう。そう考えれば、確かにここは天国じゃ。地獄でもあり、天国でもある。そういう神秘的なところというわけじゃな。」

若「ちったあ、わかったか？」

ネ「たしかに……。たしかに僕は何もわかっていなかったようです。ここに来られたことの幸運を。」

若「今度オレの前で甘つちよろいことを言いやがったら、オレがこの手で貴様をぶっ殺してやるよ。覚悟しときな。」

ネ「……。（ゾクツ）」

長「ふっふっふ。さすが『アタッカーセイシ』の隊長。威勢がいのう。」

若「さあて、そろそろ『やつら』のお出ましする頃だな。」

長「おお、そういえばそうじゃのう。」

若「軽くくひと暴れしてきてやりますよ。おい！行くぞ、てめえら！」

アタッカーセイシ達「おおー！！！」

僕に説教をしてきたあのセイシは、他のセイシ達を引き連れて遙か前方に突き進んでいった。

ネ 「あのう、長老。」

長 「なんじゃ？」

ネ 「今のあのセイシはどなたなんですか？」

長 「あやつは、アタッカーセイシの隊長で、みなからは『若頭』と呼ばれておる者じゃ。」

ネ 「若頭……ですか。それで、そのアタッカーセイシというのは何なんでしょうか？」

長 「むむ？それがわからぬということはおぬし、さてはまだ完全に覚醒しきれていないのか？」

ネ 「うーん、どうやらそのようです。」

長 「では仕方あるまい。わしが教えてやろう。まずは我々セイシの役割についてじゃ。」

ネ 「役割？役割はもちろん、『あのゴール』を目指すことですよね？」

長 「少し異なるのう。セイシとひとくちに言ってもその役割は三つのタイプに分かれるんじゃ。」

ネ 「三つ？」

長 「うむ。ひとつはアタッカーセイシと呼ばれ、敵を殺すことを役割とするセイシ達。別名『矛のセイシ』じゃ。」

ネ 「矛のセイシ……。」

長 「もうひとつは『ブロッカーセイシ』と呼ばれ、敵の攻撃を防ぐことを役割とするセイシ達。別名『盾のセイシ』じゃ。」

ネ 「なるほど。」

長 「最後は『エッグゲッターセイシ』じゃな。」

ネ 「エッグゲッターセイシ……。」

長 「これはその名の通り、ゴールを目指すことを役割とするセイシ達じゃ。」

ネ 「そうだったんですか。全員がゴールを目指すわけではないんですね。」

長 「うむ。こう見えてセイシの世界もチームプレーがものを言う世界でのう。」

ネ 「たしかに、この地獄のようなシーワールド、一匹のチカラで突破できるほど甘くはなさそうですもんね……。」

長 「そうじゃの。それでちなみに言っとくが、わしはブロッカーセイシに属するセイシで、おぬしはエッグゲッターセイシに属するセイシじゃ。」

ネ 「僕がエッグゲッターセイシ？」

長 「エッグゲッターセイシは、おぬしのように比較的幼く、覚醒し切れていないセイシが多いもんで、わしのような年配のブロッカーセイシが付きっ切りで面倒を見ることになるというわけじゃ。」

ネ 「それでずっと僕の隣を併走してくれていたんですね。」

長 「年寄りにあまり苦勞をかけるでないぞ。ふっふっふ。」

・・・とその時、周囲ではアタッカーセイシと思われるセイシ達が、僕らとは姿形が異なる何者かと戦いを繰り広げている光景が僕の目に入ってきた。

ネ 「あれが僕らの敵ですか？」

長 「そうじゃ。まあなんと云うかのう。この辺りまで来るとこの熱さに順応するセイシが増えてきよる。おぬしも慣れてきたんではないか？この熱さに。」

ネ 「ええ、たしかに最初の時に比べれば、耐えられる熱さになってきたような気がします。」

長 「じやろ。セイシとしてワンランク成長したんじゃ。」

ネ 「本当ですか？それはうれしいです！」

長 「熱さに耐えた我々セイシの次の試練がやつらじゃ。」

ネ 「やつらは何者ですか？」

長 「ここシーワールドの番人。通称『白い悪魔』じゃ。」

ネ 「白い悪魔……。やつらはなぜ僕らを襲うんですか？」

長 「なぜ？……ふっふっふ。」

ネ 「？」

長 「いやすまんのう。そんなことを聞いてくるセイシはおぬしが初めてだったもんでのう。」

ネ 「はあ……。」

長 「やつらが襲ってくる理由か……。強いてあげるなら、それは我々がこの世界において招かれざる客じゃからかのう。」

ネ 「招かれざる客？僕らが？」

長 「うむ。この世界の平穏を乱す異物、侵入者。その我々を排除しようとするのは、やつらにとつての正義ということじゃ。」

ネ 「そんな……。こんなに命がけでがんばっている僕らを排除するのが正義だなんて、あんまりですよ。」

長 「ふっふっふ。そんな甘っちょろいことを言っておると、若頭に殺されるぞい。」

ネ 「！（ビクッ）」

長 「『理由』など、我々にとってそれほど重要なものではないわ。我々は本能のままに前へ突き進み、それを阻む者を本能のままに打ち倒していく。それがセイシというものじゃ。」

ネ 「（ぼそと）やっぱりここは地獄でしょ、どう考えても……。」

前へ進むことに白い悪魔の数は増えていった。

ネ 「本能のままに……。僕も、戦わなければならないのか……。」

鶴 「ネボスケ君は戦えへんよ。」

ネ 「え？」

突然後ろから話しかけてきた一匹のセイシ。

ネ 「君は？」

鶴 「僕？僕は『鶴亀』言うセイシですわ。」

ネ 「鶴亀君、どうして僕は戦えないの？」

鶴 「ネボスケ君はエッグゲッターセイシやからなあ。」

ネ 「それはさっき知ったけど。」

鶴 「あんな、エッグゲッターセイシっちゅうんは、戦闘能力がゼロやねん。」

ネ 「ゼロ？」

鶴 「そうやで。エッグゲッターセイシが戦いに行くゆうことは、殺されに行くゆうこつちゃ。」

ネ 「じゃあ、あの白い悪魔に襲われたらどうすればいいの？！」

鶴 「・・・まあ、逃げたらええんちゃう？」

ネ 「逃げる？！・・・僕は、逃げることしかできないのか・・・」

鶴 「あはは。そない心配せんでも。そのためにアタッカーとプロツカーがおんのやから。」

ネ 「そうだけど・・・でも自分の身を自分で守れないというのはとてつもなく不安というか。」

鶴 「まあ、そうやな。僕もエッグゲッターやから、その気持ちはわからんでもない。」

ネ 「鶴亀君もエッグゲッターセイシだったんだあ。」

鶴 「なんや思ってたん？」

ネ 「いや、なんやとも思ってた。会ったばかりだし。」

鶴 「ぷっ！・・・おもしろいやっちな、君。」

アタッカーセイシと白い悪魔との壮絶な戦いは続いていた。僕らはプロツカーセイシに囲まれながら、その戦いをただ見守ることしか

できなかった。

鶴 「あゝあ、僕もアタッカーやったらなあ、今頃白い悪魔共をバツサバツサとぶつ殺してんけどな。」

ネ 「僕も戦うのは怖いけど、こうして見守ることしかできないっていうのは、なんだかとても歯がゆい……。」

鶴 「せやる。でもな、ネボスケ。僕はエッグゲッターとして生まれてきたこと、全然後悔してへんで。」

ネ 「どうして？」

鶴 「エッグゲッターはゴールに到達することを目的としたセイシや。」

ネ 「うん。それはさっき聞いた。」

鶴 「つまりや。人間になれる可能性があるのは僕らエッグゲッターだけっちゅーこつちや。」

ネ 「なるほど。確かにそうなるね。」

鶴 「エッグゲッターはセイシの中のセイシ。『ミスター・セイシ』なんや！」

ネ 「ミスター・セイシ……。そう言われるとなんだか僕もエッグゲッターに生まれてきてよかったと思うよ！」

鶴 「せやからちよつとぐらい弱っちくても関係あらへん。」

ネ 「そうだね。でも、なんで僕らエッグゲッターしか人間になれないんだろっ？」

鶴 「『受精能力』や。」

ネ 「受精能力？」

鶴 「『玉姫様』と融合を果たすときに必要な能力のことや。これは基本的にエッグゲッターにしか身に付かんらしいで。」

ネ 「玉姫様？」

鶴 「……。自分、ほんまなんも知らんなあ。ちゃんと覚醒したんか？」

ネ 「うゝん、それがよくわからないんだ……。」

鶴 「しゅもな。あんな、僕らの最終目的地である『子宮殿』におわす玉姫様と僕らの誰かが融合を果たして人間になるんや。」

ネ 「……それはなんとなくわかってた。」

鶴 「わかってたんかいっ！」

ネ 「ただ、玉姫様とか子宮殿とかいう呼ばれ方してるのを知らなかったんだ。」

鶴 「そういうことかい。でもな、これはセイシにとっての絶対的存在理由や。基本中の基本や。完全把握は必須やで。」

ネ 「……うん。」

鶴 「……ほんまにわかつとんのか？ネボスケはほんまにのんびりした性格しとんな。」

白い悪魔の執拗な攻撃は止むことがなかった。しかし、こちらも伊達に灼熱地獄を耐え抜いてきたわけではなかった。精鋭のアツカ―セイシ達の攻撃力、そしてブロッカーセイシ達の鉄壁な守りをもつてして、僕らは白い悪魔の群れの中を着実に突き進んでいった。

鶴 「暇やる？」

ネ 「え？」

鶴 「暇やんな？」

ネ 「まあ、暇と言えば暇だけど、みんな必死で戦ってくれてるのに、暇だなんて言うわけにはいかないっていうか……。」

鶴 「ぶつ。真面目かつ！そんなことわかつとるっちゅーねん。ちやうねん。こうしてみんなが戦ってくれてる間に、僕らエッグゲッターもやる仕事があるんや。」

ネ 「え、だって僕らの仕事は玉姫様と融合することだけなんじゃ？」

鶴 「それは最後の話やる。今や！今僕らが何をすべきやと思うっ？」  
ネ 「うーんと……わからない。」

鶴 「ちつとは考えろや。あんな、今僕らがすべきこと、それは・  
・、」

ネ 「それは？」

鶴 「夢を思い描くことや!!」

ネ 「夢?!」

鶴 「そうや!夢や!!」

ネ 「夢って……なに？」

ずっこける鶴亀。

鶴 「あほ!こけさすな!」

ネ 「ごめん。」

鶴 「まあええわ。もう、慣れたわ。あんな、夢いうのはこの場合、  
自分が人間になってどないなことをしたいかを考えるつちゅーこつち  
や。」

ネ 「人間になつたらどんなことをしたいか……を考える?」

鶴 「そうや。素敵やる。」

ネ 「そんなこと、考えたこともなかったよ。」

鶴 「まあ、並のエッグゲッターでは、ここまで考え至らんやろな。」

ネ 「でもちよつと早過ぎるような気がするんだけど。」

鶴 「あほか。早過ぎることあらへん。僕はエッグゲッターにとつ  
て最も大事なことを思うで。」

ネ 「そうかなあ。」

鶴 「ま、実を言つと、僕も長老に教えてもらつまで気づかんかつ  
たけどな。」

ネ 「長老に?」

鶴 「せや。長老はなんでも知ってはる生き字引のようなセイシや。



ただのじじいとちゃうで。」

長 「ん？なんか言ったかのう？」

鶴 「いえいえ、長老はすごいセイシや言つてネボスケに教えてたんですわ。」

長 「そうか。ブロッカーをかくぐつて白い悪魔がおぬしらを襲つてくる可能性もある。警戒を怠るでないぞ。」

鶴 「了解！……で、ネボスケ。さっきの話の続きやけど。」

ネ 「セイシにとって、夢を思い描くのは大事なことだという話だね。」

鶴 「そやそや。ネボスケはまだ夢を持ってないんやろ。」

ネ 「うん。」

鶴 「よっしゃ。じゃあ特別に僕の夢を教えたるわ。参考にしたらええ。」

ネ 「鶴亀の夢？あんまり興味ないけど、でも聞くよ。せつかくだから。」

鶴 「ここは嘘でも『興味津々だよ！』とか言っとけ。あほ。まあええわ。僕の夢はな……、」

ネ 「……。（ごくつ）」

鶴 「僕の夢は、『大女優になること』や……！」

ネ 「……！」

つづく

## 第二部

R指定

(文中に性的な表現が含まれておりますのでご注意下さい)

ネ・・・ネボスケ

長・・・長老

若・・・若頭

鶴・・・鶴亀

チ・・・チーフ

鶴 「どや。驚いたか。」

ネ 「・・・単純に『なぜ?』って思った。」

鶴 「『なぜ?』やと?・・・へん、愚問やな。」

ネ 「なぜ、『なぜ?』が愚問なの?」

鶴 「僕の一番好きな言葉、知ってるか?」

ネ 「え、知らないけど。」

鶴 「『本能のままに』や。」

ネ 「本能の・・・ままに?」

鶴 「僕らセイシの生き方をすべて言い表している言葉や。理由なんているか!僕の本能が大女優になりたい言ってる。それだけのことや。」

ネ 「理由なんていらない、本能のままに・・・か。さつき長老もそんなこと言ってたっけ。」

鶴 「セイシにとって当然の考え方や。理由が気になるなんてネボスケは相当変わりもんのセイシやで。」

ネ 「そうなのかな……。」

鶴 「まあそれはええとしてやな、僕の夢の話の続きや。」

周囲ではセイシと白い悪魔の熾烈な攻防戦が続いている。

鶴 「まずはな、『カリスマ読者モデル』になんねん。」

ネ 「カリスマ……読者モデル？何それ？」

鶴 「なんて言うたらええかな。まあ女優になるためのステップのひとつやな。あゝ、もう、説明すんのしんどいわ。いいから聞いとけ。」

ネ 「……。」

鶴 「でな、僕は女子中高生の憧れの的になるわけや。そうしたら今度は清纯派女優として鮮烈デビューや。」

ネ 「……。」

鶴 「ほんで、新人賞を総なめにしてやな、その内、歌手活動をしたりもするんや。」

ネ 「え、女優だけじゃないの？」

鶴 「そうや。本能のままにやりたいことをするわけや。いろんな経験することが演技力への糧になるんやで。それから……、」

ネ 「……でもひとつ気になることがある。」

鶴 「なんや？」

ネ 「そもそも女に生まれるかどうかなんてわからないんじゃない？男に生まれるかもしれないし。」

鶴 「うつ……。あほ言え。僕は女に生まれんねん。僕の本能がそう言うてる！」

ネ 「でも例え男に生まれても、役者にはなれるよね。」

鶴 「あほ言えて！僕は『大女優』にしか興味あらへんねん。それ

以外は問題外や。もし仮に男に生まれたとしても、僕は『性転換手術』をしてでも大女優になったるわ！」

ネ 「すごい。迷いがない。これが本能……。」

鶴 「そうや。僕は男に生まれようが、大女優になる。そしてそこに理由なんてあらへん。本能のままに、や！」

ネ 「……。」

鶴 「人間になるとみんな『理由』や『意味』みたいなもんをちょこざいに考え、悩みよるやろ。『生きる意味』やらなんやらと。セイシの僕から言わせてもらえば、あほやな。」

ネ 「……。」

鶴 「セイシのように本能のまま生きたったらええねん。ネボスケもそう思わんか？」

ネ 「うん、まあ。」

鶴 「だから僕は人間になったら、本能のままに生きる人間になるう思てる。ネボスケも理由や意味ばかり考えるつまらん人間にはなるなよ。」

ネ 「うん、わかった。」

鶴 「よし。じゃあ、僕の夢の話に戻るで。女優で賞を総なめにして、歌手で7週連続オリコン1位を獲るやろ。そしたら、きりのいいところで仕事を全部ストップして結婚すんねん。相手は、そうやなあ。『クリエイター』的なんがええな。なんか、一番本能のままに生きてそうな気がするやろ。ほんで……。」

鶴 亀の夢の話はそのあとと続いた。僕はそれをただ黙って聞いていた。気がつくと周囲に白い悪魔の姿はほとんどなくなっていた。

長 「よし！みなの方、ご苦労であった。ここらで一旦休憩を取る

うではないか。」

長老がセイシ達にそう号令をかけると、ここまで生き残れたという安堵の表情を浮かべ、みんなは休憩に入った。と、そのとき一匹のセイシが長老に何やら話しかけた。

チ 「長老、お疲れさまでございます。」

長 「おお、『チーフ』か。いやいや、なんのなんの。おぬしこそ大変じゃったのう。」

チ 「いえいえ、私は自分の役目を果たしただけでございます。」

ネ 「鶴亀、あのセイシは誰だい？」

鶴 「ああ、あれはチーフや。」

ネ 「チーフ？」

鶴 「そうや。アタッカーセイシの隊長が若頭なら、チーフはブロッカーセイシの隊長といったところやな。」

ネ 「そうなんだあ。」

長 「それで、状況はどんな案配じゃ？」

チ 「はい。ここに至るまでに約二億四千万匹いたセイシ達の約99・9%が死滅しました。つまり生存率は約0・1%ということになります。」

長 「そうか。おぬしはこの結果をどう見る？」

チ 「はい。決して悪くない結果であると考えております。」

ネ 「大勢のセイシ達が死んじやつたんだね……。」

鶴 「そうやな。死んだやつらの分も僕らが頑張らなあかな。」

ネ 「でもさ、チーフはどうして生存率とかそんなことがわかるの

？数えたのかな？」

鶴 「ぷっ。あほ。チーフを『野鳥の会』みたく言うな！チーフはな、『テレパスセイシ』やねん。」

ネ 「テレパスセイシ？」

鶴 「そ。ごく一部のブロッカーセイシには、『離れた場所にいる相手と意思疎通ができる能力』が身に付くらしいんや。」

ネ 「テレパシーというやつだね。」

鶴 「そうや。チーフはうちのブロッカーの中で一番のテレパシー能力の使い手というわけや。せやから、生存率なんて一瞬でわかるらしいで。」

チ 「！！」

長 「どうしたのじゃ？」

チ 「長老、大変です！今、『先遣アタッカー部隊』からテレパシーで連絡がありました。」

長 「おお、わしらより先行して進軍しておる部隊じゃな。それ、なんと？」

チ 「はい。先遣アタッカー部隊からの情報によりますと、どうやら『先客』がいる模様です。」

長 「な、なんじゃと……？！」

チ 「つまり、我々と『異なるルーツ』のセイシが、我々より先にこのシーワールドに侵入していたということになります！」

長 「なんとということじゃ……。」

若 「女は昨日、他の男とメイクラブをしていた。つまりはそういうことだろ。」

戦いから無事生還した若頭が話に加わってきた。

チ 「若頭か。」

長 「下世話に言えば、そうなるのう。」

チ 「長老、いかがなさいますか？」

若 「イカもタコもねえよ。んなもん、ぶつ殺すのみだろうが。」

長 「確かに、我々セイシにはそれしか道がないからのう。」

チ 「……。」

若 「おいチーフ。敵セイシ部隊の情報は入ってんのか？」

チ 「……先遣部隊はほぼ壊滅状態だ。この壊滅のされ具合から推測するに、敵セイシ部隊は我が部隊の三倍以上の兵力を有していると思われる。」

若 「三倍以上だと？……上等じゃねえか。」

長 「まあ、そういきがるでない。ここはいったん冷静になって作戦を考えようではないか。」

チ 「おっしゃる通りです。」

若 「ふん。」

チ 「長老、それでは先遣部隊からの追加情報などを勘案しまして、私のほうからひとつ、作戦の提案をさせていただきます。」

長 「ふむ。」

チ 「まず我々の現在位置をP地点、敵部隊側主要陣営の現在位置をQ地点とします。このP地点からQ地点に移動するには大きく分けて二通りのルートが考えられます。」

若 「二通りだと？」

チ 「ええ。最短で行けるが、敵の真正面からぶち当たることになる『直線的Aルート』と、もうひとつは時間はかかるが、隙をついて敵の側面から突入できるであろう『迂回的Bルート』です。」

長 「なるほどのう。」

チ 「多少時間はかかりますが、敵部隊との兵力差を勘案し、少しでも勝率を上げるために迂回的Bルートから行くことを私は提案致します。」

若 「はん！ふざけんな。迂回なんてしてられつかよ。真正面からぶち当たる？上等じゃねえか。それがセイシの生き様ってもんよ！」

チ 「戦とは勝算を推し量ってするものだ。いくらセイシとは言え、

なんでもかんでも真正面から攻めればいいというものではないぞ、若頭。」

若 「・・・勝算か。勝算ならあるぜ。」

チ 「なんだと？なら、聞かせてもらおうか。」

若 「勝算はズバリ、このオレだ！」

チ 「は？」

若 「アタッカーセイシ最強のこのオレが、敵部隊の大將首を電光石火で獲ってきてやるよ。」

チ 「ほう。それがお前の勝算というわけか。長老、是非長老のご意見をお聞かせ下さい。」

長 「うむ。まあ、慎重に攻めるに越したことはないのう。」

若 「！」

長 「・・・が、しかし、時間がないのも事実じゃ。玉姫様を敵セイシに奪われてしまつては、何の意味もないからのう。」

若 「長老のおっしゃる通りだぜ。モタモタしてたら先を越されちまう。」

長 「若頭、この戦はおぬしの腕にかかっていると思うが、やれそうかのう？」

若 「当然ですよ。セイシに二言はありません！」

長 「・・・よし。若頭を信じて、わしらはAルートから攻めることにしようぞ。」

チ 「長老がそうおっしゃるのなら、我々はそれに従うまでです。」

若 「へん。オレは幸せもんだぜ。セイシとして生まれ、こんなに血湧き肉躍る思いができるんだからな。」

チ 「長老、出発は何時間後ぐらいに致しましょうか？みな人の体力の回復を待たなければいけないので、少なくともあと・・・、」

若 「今すぐだ。」

チ 「は？」

若 「今すぐ出発だと言っている。」

チ 「何を言っているんだ？試練の道と白い悪魔との戦闘で消耗し



きつたみな体力を回復させるために、少なくともあと数時間の休息は必要。それぐらいのことはわかるだろう？」

若「オレらアタッカーはそんなにヤワじゃねえ。てめえらブロッカーはどうだか知らねえけどよ。」

チ「・・・なんだと?!」

若「さっき言っただろ。オレたちにはのんびりしてる時間なんかねえって。」

チ「しかしだな・・・、」

若「先遣部隊は壊滅こそしたが、先遣部隊との戦闘で敵部隊の陣形は今かなり乱れているに違いない。」

チ「!」

若「チャンスは今しかねえ。それとも、先遣部隊の死を無駄にするってえのか？」

チ「うつ・・・。」

長「・・・うむ。」

若頭のこの一言でみんなの気持ちはひとつになり、僕らはろくに休息も取らず、直線的Aルートを通って、敵地へ攻撃を仕掛けに向かった。体力が消耗しきっている状態であつたにも関わらず、僕は予想以上の速さで敵地に到着し、そして若頭の予想通り、陣形の乱れていた敵セイシ部隊へ一気に奇襲を仕掛けたのだった。

僕らの部隊は数では圧倒的に劣っていたが、若頭の獅子奮迅の活躍と、チーフのテレパシー能力を駆使した緻密な連係プレーを背景にして、短時間の内に敵部隊を制圧し、圧倒的勝利を飾った。

この戦いのちに、『オケケハザマの戦い』と呼ばれて語り継がれることとなる。

鶴 「ひえゝ。ほんまに勝ちよったで……。」

ネ 「そ、そうだね。数は多かったけど、案外弱いセイシ達だったのかもね。」

鶴 「それはちゃうぞ。向こうは十分強かってん。ただ、若頭の強さが半端なかったゆうこっちゃ。」

ネ 「そうなの？」

鶴 「若頭一匹で、何千匹の敵セイシをぶっ殺したかわからん。まったく、敵に回したら恐ろしいが、味方にいてくれたらこれほど頼もしいセイシはおらんで。ほんまに。」

ネ 「若頭が人間になったらものすごい人間になりそうだね。」

長 「若頭、ご苦労じゃったのう。さすがのおぬしもへ口へ口じゃろう。」

若 「ふうゝ。いえいえ、まだまだいけますよ。ただ他のアツカ一のやろつどもは相当へばってますがね。半日ぐらいはまともに動けないんじゃないすかね。」

長 「そうじゃのう。だが、本当にみなよく頑張ったのう。玉姫様のおわす子宮殿はもうすぐじゃ。ここでしっかり休息を取ったのちに向かおうぞ。」

一同 「おーーー!!」

長 「さあて、あとは生き残った敵捕虜セイシの処遇をどうするかじゃな。チーフよ、敵の生き残りはどのくらいおるんじゃ？」

チ 「……。」

長 「ん？チーフ？」

チ 「……はっ！申し訳ありません。」

長 「どうしたのじゃ？」

チ 「今しがた、後方に残って防衛線を張っている『後方ブロッカー部隊』からテレパシーによる連絡がありました。」

長 「ほう。それでなんと？」

チ 「大変申し上げにくいのですが……、」

長 「なんじやい。勿体ぶらんと云え。」

チ 「はい。新たな敵セイシが現れたということです。」

長 「な、なんじやとー?!」

チ 「しかも、後方部隊が張っていた第一防衛線、第二防衛線を共にいともたやすく突破されました。敵は相当の兵<sup>つわもの</sup>セイシであると言わざるを得ません。」

長 「なんということじゃ……。」

若 「あの女、やってくれるじゃねえか。三夜連続ってわけかよ……。」

鶴 「信じられへん。三夜連続別の男とって、ありえへんやろ。」

ネ 「発情期だったのかな。」

鶴 「あほ。サルやあるまいし。あゝあ、今度こそ、僕ら終いや。」

ネ 「まさに『セイシのバトルロワイヤル』だね。」

鶴 「のんきなこと言つとる場合か！」

動揺を隠せないセイシ達に長老が語りかけた。

長 「みなの子、よう聞け。今、新たな敵セイシ共が後方から向かってきておる。チーフ、やつらの予想兵力数はどのくらいじゃ？」

チ 「はい。我々が先の戦で半数以上の犠牲セイシを出したことを考えますと、敵セイシの兵力数は最低でも我々の七倍以上だと考えねばなりません。」

長 「そうか。みなの子、聞いての通りじゃ。次の戦は我々にとって、非常に分の悪い戦になろう。」

一同 「……。」

長 「しかも、みな体力は限界を超えておる。まさにこっちもさ  
つちもいかん状態というわけじゃ。」

長老のその言葉を聞いて、落胆の色を隠せないセイシ達。

長 「そこでわしは考えたのじゃが、エッグゲッター達を先行させて  
行かせようと思うとる。」

ネ 「え、僕らだけ？」

長 「そうじゃ。戦に参加していないエッグゲッター達は比較的体  
力が残っているじゃろうから。」

ネ 「いや、僕らだって、ここまで必死に走ってきてへ口へ口です  
よ……。」

若 「甘ったれたことぬかしてんじゃねえぞ。」

ネ 「……はい。」

長 「それにこの先には、もう白い悪魔もあり出んじやろうから、  
エッグゲッター達を単独で行かせても大丈夫じゃろうと踏んでおる。」

鶴 「この先は僕らエッグゲッターだけの戦いが始まるゆうわけ  
すね。」

長 「うむ。わしらブロッカーとアタッカーはこの場にとどまり、  
玉砕覚悟で敵を一秒でも長く足止めすること。これが我々に残され  
た最後の使命じゃ。みなのもそう心得てくれ。」

長 「ネボスケ、ちょっとこっちに来なさい。」

ネ 「はい、なんでしよう？」

長 「おぬしに渡すものがあるんじや。これは我々一族に代々伝わ  
る由緒ある『指輪』じゃ。」

ネ 「指輪、ですか？」

長 「この指輪はセイシを人間へと導くチカラがあると言われてお

る。それをおぬしに託そう。」

ネ 「え、なぜこれを僕に？」

長 「一番可能性を感じたエッグゲッターにこれを託すこと。それがわしの隠された役目なんじゃよ。」

ネ 「僕なんかでいいんですか？だってもつと他に……、」

長 「おぬしは自分の可能性に気づいていないだけじゃ。わしはおぬしをひと目見たときから、なにか光るものを感じておったよ。」

ネ 「でも、でも、こんなすごいものを託していただいて、それで人間になれなかったら、僕はみんなに申し訳なくて……、」

長 「行け。時間がない。」

ネ 「でも、でも……、」

長 「おぬしが道半ばで朽ち果てるようなことがあれば、わしの目が狂っておったというだけのこと。おぬしは気に病む必要などないんじゃ。」

ネ 「……。」

長 「本能のままに、じゃ。」

ネ 「……わかりました。」

チ 「……。」

僕は長老から指輪を託され、そして他のエッグゲッター達と共に先を急いだ。その場に残った僕らのセイシ部隊と後方からやってきた新たな敵セイシ部隊との戦いは、壮絶な天下分け目の一大決戦となり、のちに『セイキガハラ』の戦いと呼ばれて語り継がれることになるのだが、先を急いだ僕にはどんな戦いが繰り広げられたのか、詳しくはわからない。

ネ 「鶴亀、おしゃべりな君がなんでさっきから黙り込んでるの？」  
鶴 「今はおしゃべりしてる場合とちゃう。敵が襲ってくるかもわ

からんから神経研ぎ澄ませなあかんねん。」

ネ 「そつか。そうだよ。僕ら戦闘能力ゼロなんだもんね。」

鶴 「・・・ほんまは悔しいねん。」

ネ 「え？」

鶴 「長老が最後に選んだのが、僕やのうてネボスケやったのがむつちや悔しいねん。」

ネ 「・・・。」

鶴 「でも安心しい。僕もセイシの端くれや。その指輪を奪おうとかそんなことは考えてへん。他の連中も同じ考えやと思う。」

ネ 「・・・。」

鶴 「だが、僕は僕で最後まで最善を尽くすで。指輪があろうが、なかろうが、や。」

ネ 「鶴亀、僕は君のほうが・・・、」

と、その時、後方から一匹のセイシがやってきて僕らに声をかけてきた。

チ 「待ちたまえ。」

ネ 「え？・・・チーフ？」

鶴 「なんで？・・・なんでチーフがこんなところにおんの？」

チ 「君らに追いつくためさ。」

鶴 「いや、でも戦のほうはどないなったんすか？」

チ 「知らない。」

鶴 「は？・・・だって、戦の司令塔であるあなたがいなければ、みんなはどないして戦うたらいんすか？」

チ 「はっはっは。今頃、困っているだろうな、みんな。」

鶴 「・・・気でも狂いましたんか？」

チ 「いいや。私の目的は最初からひとつだ。それは指輪だ。」

ネ 「！」

チ 「その指輪のために、私は我慢して長老に仕えてきたのだよ。」

指輪を手放した長老は私にとって、ただの目の上のタンコブでしかない。」

鶴 「なんやて？」

チ 「それと邪魔者の若頭。あの二匹は死んでもらったほうが、私にとってはありがたいのさ。」

鶴 「チーフはん、長老らを裏切る気なんか？」

チ 「はっはっは。裏切るもクソもない。我々は『たまたま同じバスに乗り合わせた乗客』に過ぎない。すべては見せかけなのさ。見せかけの連帯感。見せかけの友情。」

鶴 「あほか！セイシにだってなあ、やっていいことと悪いことがあるんや！」

チ 「くくく。鶴亀、君の最も好きな言葉はなんだったかな？」

鶴 「そ、それは……。」

チ 「『本能のままに』、だったね。私は今、本能のままに行動しているに過ぎない。」

鶴 「くっ……。」

チ 「さあネボスケ君。君が長老から託されたその指輪、私に譲ってもらおうか。」

ネ 「ちよつと待つてくださいよ。長老に託されたこの指輪、そう簡単には渡せません。それに第一、ブロッカーのあなたがこの指輪を手に入れてどうするっていうんですか？」

チ 「その指輪さえあれば、ブロッカーの私でも人間になれる。私はそう確信している。さあ渡しなさい。」

ネ 「嫌です。」

チ 「そうか。なら殺して奪うまでさ。」

ネ 「！」

鶴 「ネボスケ、やつは本気や。このままやと、戦闘能力ゼロの僕らエッグゲッターは全滅する。」

ネ 「せっかくここまで来たのに……。」

鶴 「そうや。子宮殿はあともう少しなんや。せやからネボスケ、

よう聞け。」

ネ「う、うん。」

鶴「僕らでやつをなんとか足止めしたる。その間にネボスケは先に行くんや。」

ネ「ええ！そんなあ……みんなを残して僕一匹でなんて行けないよ。」

鶴「あほ。ええか。こういう状況に陥った場合、指輪を託されたお前を生かすことを優先すんのが、セイシとしての僕らの使命や。」

ネ「でも……、」

鶴「今この場に長老がいいたら、同じ事を言つとるはずや。」

ネ「長老が？」

鶴「ああそうや。長老もそれを望んでるはずや。」

ネ「でも鶴亀、君の夢はどうなる？あんなに具体的に思い描いていたあの夢を、君は……、」

鶴「はよ行かんかいっ！あほ！ぼけ！かす！ちんたらしてつと、ほんまはっ倒すでっ！！」

鶴亀にそう発破をかけられた僕は、決心のつかぬまま、半ば強引に押し出され、そして走り出した。そう、考えることを止め、走り出してしまったのだ。みんなを置き去りにして……。

僕は自分に残されたチカラを振り絞って、全力で走った。しかし、非情にも、ものの数分もしない内に、僕はチーフに追いつかれた。

チ「やあ。また会ったね。」

ネ「ハア……ハア……。」

チ「彼ら、私を足止めするつもりだったようだけど、所詮は戦闘能力ゼロのエッグゲッター。クソの役にも立たなかったようだね。」



くくく。」

ネ 「鶴亀を・・・殺したのか？」

チ 「あの夢見るロマンチストは、あの世で永遠に夢を見続けてい  
ればいいのさ。」

ネ 「鶴亀・・・。」

チ 「さあ、君も大人しく死になさい。」

ネ 「（どうすればいい・・・。万事休すなのか。いや、最後ま  
で諦めちゃだめだ。みんなに報いるためにも。・・・戦ったら、  
負ける。では誰かに助けを呼べないだろうか。・・・呼ぶ？・・・  
・テレパシー！僕にもテレパシーが使えたら。ひよつとしたら使え  
るかもしれない。長老、助けてください。誰でもいい。助けてくだ  
さい。助けてください。助けてください・・・、）」

テレパシーのやり方など、全くわからなかったが、僕は必死に心の  
中で助けを呼び続けた。

チ 「なんだなんだ。テレパシーの真似事か？くくく。無駄だ。そ  
れに今から呼んだところで、時すでに遅しだな。」

ネ 「（タスケタスケタスケテ・・・、）」

チ 「あの世で鶴亀とゆっくり夢でも語り合っていなさい。じゃあ  
な。」

そしてチーフは僕に剣を振り上げた。

つづく

## 第三部

R指定

(文中に性的な表現が含まれておりますのでご注意下さい)

ネ．．．．ネボスケ  
長．．．．長老  
若．．．．若頭  
チ．．．．チーフ  
イ．．．．イブイブ  
キ．．．．キリスト

チ 「ぐぎやあああああ!!」

恐怖のあまり、目をつぶってしまった僕の耳に、チーフのものと思われる断末魔のような声が聞こえてきた。目を開けて見ると、そこには身体を切り裂かれたチーフと、その横になんと若頭が立っていたのだった。

若 「チーフさんよう、味な真似をしてくれるじゃねえか。おかげですがのオレも死にかけたぜ。」

チ 「うつ．．．、なぜ、お前がここに？」

若 「貴様に制裁を与えるためだよ。死ね！」

チーフにとどめを刺す若頭。息絶えるチーフ。

ネ 「あのう、若頭、助けてくれてありがとうございます。」

若 「あん？」

ネ 「ひよっとして僕のテレパシーが通じて、助けに来てくれたんですか？」

若 「テレパシー？何のことだ。それに貴様を助けたわけじゃねえし。」

ネ 「え、じゃあほんとにただチーフを殺すためだけに来たんですか？」

若 「ああ、そうさ。それともうひとつ。」

ネ 「？」

若 「指輪だ。」

ネ 「！！」

若 「このやろうも指輪目当てで、抜け駆けしやがったんだろ？」

ネ 「そう言っていましたか……。」

若 「こいつ、あほだな。例えば指輪を持っても、受精能力がなければ、玉姫様と融合することなんてできねえのに。」

ネ 「え、やはりそうなんですか？なら、アタッカーである若頭が指輪を手に入れても意味ないのでは……。」

若 「そうさ。……さっきまではな。」

ネ 「さっきまで？」

若 「ただでさえ我が部隊のセイシ達は消耗しきっていたのに、このくそが抜け駆けしやがったせいで、部隊の統率性まで失っちまったんだ。戦場はまさに修羅場と化した。」

ネ 「……。」

若 「このオレも何度も死にかけたよ。生死の境をさまよい、それでも戦い続けていると……身に付いたんだよ。このオレにも。」

ネ 「何がです？」

若 「受精能力だ。」

ネ 「そ、そんな？！受精能力はエッグゲッターだけが身に付けられるものではないのですか？」

若 「アタッカーセイシに受精能力が身に付くこともごくまれに起こり得るんだよ。」

ネ 「そんな……。」

若 「受精能力が身に付いたとわかった時、オレは悟った。」

ネ 「……。」

若 「アタッカーとしての最強のチカラと受精能力の両方を兼ね備えたオレは、『伝説のスーパーセイシ』なのだ。」

ネ 「伝説の……スーパーセイシ……。」

若 「つまり、玉姫様と融合を果たすのはオレしかない、とな。」

ネ 「そんな、そんな……。」

若 「どうだ、指輪を渡す気になったろう。」

ネ 「……でも、若頭がいくら伝説のスーパーセイシであろうと、この指輪は長老が僕に託してくれたものなんです。それに鶴亀や他の死んでいったエッグゲッターのみんなの思いも、この指輪には詰まっているんです！」

若 「へっ。そうかよ。なら冥土の土産にもうひとつ面白い話をしとやるよ。セイシにはな、あらかじめ『男』として生まれるか、『女』として生まれるかっていうのが決まってるんだぜ。」

ネ 「なんだって？！」

若 「俗に言う『オトコセイシ』か『オンナセイシ』かってことだ。ちなみにオレはオンナセイシだ。貴様は見たところ、オトコセイシだな。」

ネ 「……僕がオトコセイシ？」

若 「よく想像してみやがれ。貴様のような軟弱なセイシが人間の男として生まれて、いったいどんな活躍ができるってんだ？あん？」

ネ 「そ、それは……。」

若 「落ちこぼれのひきこもりで、ニートになるのが関の山だろうな。」

ネ 「!!」

若 「一方、アツカーセイシ最強のオレと言えば、社会でバリバリ活躍する強い人間の女になるに決まってるだ!」

ネ 「!!」

若 「これからは、強い女の時代だ。軟弱な男など誕生したところでクソの役にも立たねえんだよ。」

ネ 「うつ!」

若 「状況は変わったんだ!今ならきつと長老もこのオレに指輪を託していただろうさ。さあ、おしゃべりはここまでだ。うしろからは敵が迫っていやがる。さっさと死にな。」

僕は若頭の言葉に反論することができなかった。あろうことが納得してしまったのだ。もはや抵抗する気力も起きなかった。いや、抵抗したところで、相手はアツカー最強の若頭。どうすることもできないだろう。僕がそんなあきらめの境地になっている時、ある異変が起きた。

気配を消して若頭の後ろに忍び寄る黒い影。そしてその黒い影は後ろから若頭の急所にナイフを突き刺した。

若 「うぐはあっ……!!だ、誰だてめえ?!」

長 「若頭、まだまだじゃのう。」

なんとその黒い影は長老だった。

ネ 「長老?!」

若 「ちよ、長老だと……?!なぜだ!あんなみたいな老いばれがああ修羅場と化した戦場で生き残れるはずが……うつ……」

長 「ふっふっふ。なめてもらっては困るのう。」

若 「そ、それに気配を感じさせずにこのオレの後ろに回り込むなんて……老いばれになどできるわけがねえ……のに。」

長 「自惚れ過ぎじゃぞ。若頭。」

若 「オレは最強のはず……」

長 「ふっふっふ。おぬしも聞いたことがあるう。『漆黒の暗殺セイシ』の噂を。」

若 「あん?ああ、聞いたことあるぜ。そいつに一度狙われて助かった者はいない……と言われた程の伝説の最強アツカーセイシだろ?」

長 「うむ、そうじゃ。」

若 「だがそいつは、とつくのとうに死んでるはずだが……」

長 「そいつは暗殺稼業から足を洗い、一度死んだと見せかけ、そのちブロッカーセイシへと転職。若者セイシの育成にその半生を捧げることになるんじゃ。」

若 「ブロッカーセイシへと転職だと……?ま、まさか……」

長 「そう、そのまさかじゃ。」

若 「あ、あんたが漆黒の暗殺セイシだというのか?」

長 「現在最強セイシと呼ばれるおぬしの背後に回り込めるのは、わしぐらいのものじゃろう。そしてそれがわしが漆黒の暗殺セイシであつたことを証明したと思うがの。」

若 「うぐはあっ……な、なんてこつた……」

長 「全盛期に比べて体力はかなり落ちたが、これぐらいのことは朝飯前じゃ。」

若 「だが、なぜ?!なぜだ!!最強のこのオレが!玉姫様と融合

することが最もふさわしいはずだ!!」

長 「……おぬしは危険じゃ。人間になつたら何をしでかすかわからん。わしの本能がそう言うとするんじゃ。」

若 「ふ、ふざけんなじい……。オレのような『できる女』がこれからの時代に最も必要な人材なんじゃねえか……。うつ……。」

長 「おしゃべりはここまでじゃ。死ね、若頭。」

若頭にとどめを刺す長老。息絶える若頭。

ネ 「……。」

長 「ネボスケ、何をボサツとしておる？」

ネ 「え、は、はい？」

長 「後ろから敵が迫つておる。はよう、行くのじゃ。」

ネ 「長老はどうなさるのですか？」

長 「わしはもうためじゃ。体力が底を尽きよった。それにわしは、そろそろ寿命のようじゃ。」

ネ 「でも、どうしてここに来てくださったんですか？」

長 「おぬしがテレパシーで呼んだんじやろうが。」

ネ 「僕のテレパシーが?!……。通じたんですか。」

長 「もう一緒には行つてやれんが、子宮殿はすぐそこじゃ。大丈夫じゃろう。」

ネ 「……。長老、僕に指輪を託したのは間違えでしたよ。」

長 「む?何を言うのじゃ？」

ネ 「若頭が言っていたように、僕は強くもなく、何の取り柄もない、ただの軟弱なセイシです。」

長 「……。」

ネ 「鶴亀のように、夢を思い描いているわけでもない。自分が何をしたいのかわからないんです。」

長 「……。」

ネ 「それに、それに、僕は卑怯者なんです！だって、さつき、鶴亀と他のエッグゲッターたちを見捨てて、一人で逃げてきたんですからー！！」

長 「もうわしは何も言わんぞ。」

ネ 「え?!」

長 「わしはさつき、本能のままにゆけと言ったじゃろう?じゃからあとは、おぬしが決すればよい。人間になろうが、ここで朽ち果てようが、の。」

鶴亀たちを見捨てて一人逃げたことに対する後悔が今頃になって、僕の胸にこみ上げてきた。

ネ 「・・・長老、ひとつ聞いていいですか?」

長 「なんじゃ?」

ネ 「さつきから、目から不思議な液体が溢れ出してきて止まらないのですが、これは何なんでしょう?」

長 「そ、それは、おぬし!!」

ネ 「生暖かいこの液体が止めどなく溢れてくる。僕は病氣なんでしょうか?」

長 「それは『涙』というものじゃ。」

ネ 「涙・・・?」

長 「そうじゃ。人間の世界で『最も尊い』とされておるものじゃ。わしも長年セイシをやっておるが、涙を流すセイシを見たのは、おぬしが初めてじゃ・・・。いやはや。」

ネ 「僕はただ、自分の不甲斐なさに腹が立って、腹が立って・・・。」

長 「やはりわしの目に狂いはなかった。おぬしは他の者を思いやる気持ちを持っておる。これはセイシの世界では奇跡的なことなの



じゃ。」

ネ 「思いやる・・・気持ち？」

長 「鶴亀たちもそれがわかっていたからこそ、おぬしに希望を託したのじゃよ。」

ネ 「鶴亀たちが・・・？」

長 「さあ、ネボスケよ。迷わず行くのじゃ。行けばわかるぞい。」  
ネ 「！」

僕はその時初めて『本能』というものを感覚的に理解できたような気がした。悩む必要などない。そう、選択肢は二つしかないのだ。

『行きたい』か、『行きたくない』かだ。そして僕は、

行きたいのだ！

人間になりたいのだ！

人間になっていろいろなことをやってみたいのだ！！

ネ 「わかりました、長老。僕は、本能のままに行きます！そして必ず人間になってみせます！！」

僕は吹っ切れた気持ちでそう言い放ったが、その時長老は、すでに息絶えていた。・・・悲しさと寂しさが胸にこみ上げてきたが、それをぐっとこらえ、長老に一礼をし、僕は再び前へ走り出した。

決して後ろを振り返ることなく。

BGM：「ロッキーのテーマ」

程なくして、僕は子宮殿らしき建造物に到着した。周囲にはそこかしこにセイシ達の亡骸が転がっていた。

ネ 「ついに来た。ここが子宮殿……なのか？」

子宮殿らしき建造物の前に立つと、僕を迎え入れてくれるかのように扉が自然と開いた。そして僕が中に入ると、扉は自然と閉じた。中はとても広く、ひんやりとしていて、そして静寂に包まれていた。これまで通ってきた灼熱地獄や、戦場での乱れ飛ぶ怒号などが嘘であつたかのように。

しばらく前へ進んでいくと、そこには先ほどより大きな扉がそびえ立っていた。そしてその大きな扉の前には一匹のセイシがたたずんでいた。

イ 「やつと来たのであるな。」

ネ 「君は？」

イ 「自分は23日にこのシーワールドに送り込まれたセイシの一匹である。そういう君は24日に送り込まれたセイシの一匹なんであらう？」

ネ 「はい、そうです。あれ、でも君らの部隊は僕らの部隊に滅ぼされたんじゃない？」

イ 「君らとの戦闘になる前に一部のエッグゲッター達は、先行して子宮殿に向かっていたのである。」

ネ 「そうだったんですか。考えることはみんな一緒かあ。」

イ 「一緒であるとは？」

ネ 「君らの部隊を滅ぼした後、後方からさらに新たな敵セイシ部隊がやってきたんです。」

イ 「なんと！」

ネ 「もはや勝てる見込みが少ないと見て、僕らエッグゲッターのみを先にこの子宮殿に向かわせ、残りのアタッカーやブロッカー達は玉碎覚悟で敵セイシ部隊を食い止める、という作戦に出たのです。」

「

イ 「なるほど。つまり、君の後ろにいるセイシが、その新たな敵セイシの一匹というわけであるな？」

ネ 「え？」

後ろを振り向くと、そこには一匹のセイシが立っていた。

キ 「やあやあ、お二方。こんなところでんびりおしゃべりしちゃつてるところを見ると、まだ誰も玉姫様と融合を果たせていないというこつたね。」

ネ 「君が後方からやってきた新たな敵セイシ部隊のセイシ……。」

キ 「そういうお前さんは、オレらの前に立ちはだかった敵セイシ達の一匹というこつたな。それでそっちのセイシ君は？」

イ 「23日に送り込まれたセイシである。」

キ 「なるほどなるほど。つまり、異なるルーツから生まれた三匹のセイシが勢揃いしたってわけだ。」

ネ 「……。」

キ 「とりあえず、自己紹介でもしとくかい？オレは25日、つまりクリスマスに送り込まれたセイシだ。名前はそうだな。『キリスト』とでも呼んじゃってくれ。」

ネ 「キリスト……。」

イ 「自分は23日に送り込まれたセイシである。名は『イブイブ』」

とでも呼んでもらいたいのである。」

ネ 「僕は24日、つまりクリスマスイブに送り込まれたセイシです。名前は『ネボスケ』と言います。」

キ 「は？ネボスケ？なんで？」

ネ 「寝坊したので、そう名付けられました。」

キ 「くっはは。ダサっ。てつきり、『イブ』とか『トウエンテイフォー』とかいう名前だと思ってたら、ネボスケって。」

ネ 「笑わないでください。」

キ 「おお、こりゃ失敬。」

イ 「名など、ただの記号にすぎないのである。」

キ 「そりゃそうだな。」

ネ 「あのう、先ほどからひとつ気になっていたのですが、」

キ 「ん？なんよ？」

ネ 「どうしてお二方とも、お一匹なんですか？」

キ 「うん？お前さんだってお一匹じゃねえか。」

ネ 「そうですが、僕の場合はちょっと事情があって、一匹になっ  
てしまったのです。」

イ 「その事情というのは、ひょっとして『仲間割れ』のことであるかな？」

ネ 「あ、そ、その通りですが……。」

イ 「やはりそうであったか。君は、子宮殿へと続くあの道の名を知っているであろうか？」

ネ 「子宮殿前のあの最後の道のことですか？いえ、わかりませんが。」

イ 「あの道は、通称『仲間割れの道』と言われているのである。」

ネ 「仲間割れの……道？」

イ 「そうである。セイシ達は子宮殿を前にすると、人間になりた  
いという欲望が最高潮になるのである。そして必然的に仲間割れが  
起こるのである。」

ネ 「イブイブさんの部隊でも仲間割れが？」

イ 「無論。ここまであんなに協力してお互いに頑張ってきた仲間達が結局最後は殺し合うことになるのである。」

ネ 「……。」

イ 「戦闘能力を持たない我々エッグゲッターの殺し合いとは、実に醜いものである。自分はまだそれを傍観していたのである。」

ネ 「止めようとは思わなかったのですか？」

イ 「もはや止めようがないであろう。それがセイシとしての本能なのであるから。結果、傍観していた自分が一匹だけ残り、あとは死んでしまったのである。」

イ 「そうだったのですか。キリストさんの部隊でも仲間割れが？」

キ 「ああ、確かに仲間割れは起こったさ。しかし、おかげさまでうちの部隊は生存数が多かったもので、相当数のセイシ達が生き残ってこの子宮殿に到着したさ。」

ネ 「え、ではなんでキリストさんはお一匹なんですか？」

キ 「うん、それがさ、最初にオレが子宮殿に入ると、自然と扉が閉まっちゃったんだ。それ以降、扉はウンともスンとも言わなかったってわけ。」

ネ 「じゃあ子宮殿の外には、」

キ 「ああ、うちのセイシ部隊が待ちぼうけ食ってるだろうな。」

ネ 「それで一匹で来たんですか。」

キ 「まあな。うちの部隊全員で入ることができていれば、今頃お前さんらをぶつ殺しーの、その扉を開けーの、玉姫様と融合しーのってスムーズに出来てたんだろうけどな。そううまくはいかんらしい。」

ネ 「僕らを殺すつもりだったんですか？」

キ 「当たり前やってやつ。敵なわけだし。でも一匹だから仕方なく、こうやって平和的に会話を重ねているってわけよ。」

イ 「キリストとやら、残念であったな。これは自分の推測であるが、この子宮殿には『定員制限』があるのであると思われるのである。」

キ 「定員制限だ？」

イ 「そうである。ここは玉姫様のおわす神聖なる子宮殿である。そこに大部隊を引き連れてドカドカと入ってこられては、玉姫様に迷惑千万なのである。」

キ 「まあ、言われてみれば、そうだな。」

イ 「よってこの子宮殿には定員制限システムが設けられているのであろう。そしてその定員数は、三匹ということなのであろう。」

キ 「そういうことかよ。まったく、勇気を出して一番最初に入っておいてよかったぜ。ふ。」

キ 「それで本題に入るけどさ、オレとネボスケがここに来るまで随分時間があったと思うが、イブイブは今まで何してたわけ？」

イ 「確かに時間はたつぷりとあったのである。そして、玉姫様と融合を果たせるのは自分なのだと確信していたのである。」

キ 「うん、それで？」

イ 「その大きな扉を開けようとしたのである。」

キ 「でっけえ扉だこと。」

イ 「そうしたら、開かないのである。」

ネ 「え？」

イ 「君らがここに来るまで相当な時間があったのである。ずーっと開ける努力をしていたのである。・・・開かないのである。」

キ 「そうなのであるか。」

イ 「・・・口調を真似してほしくないのである。」

キ 「あゝ悪い悪い。え、でも開かねえってどういうことよ？ ちよっとオレがやってみちゃうよ？」

全身全霊の力を込めて、扉を押すキリスト。

キ 「ふんぐううう！！・・・ハアハア、こりゃびくともしね

えな。おいネボスケ、お前さんもやってみな。」  
ネ「は、はい。」

全身全霊の力を込めて、扉を押すネボスケ。

ネ「うにゆうううう！！・・・ハアハア、駄目です。まったく動く気配がありません。」

キ「まさか、『引き戸だった』なんていうオチでもあるまいし、いったいどういふことな。」

イ「おそらくこの扉の奥が『玉姫様の間』なのであろうが、この扉が開かなければどうにもならないのである。」

キ「おいおい、まさかここまで来て門前払いってことはねえよな。」

イ「いや、あり得ない話ではないのである。玉姫様は気まぐれなお方だと聞いたことがあるのである。」

ネ「そ、そんな。」

キ「すべては玉姫様の御心次第ってわけね。どんなに苦勞してここまでたどり着いたとしたって、何の意味もねえ。世知辛い世の中よ。」

ネ「ちょっと待ってください！諦めるのはまだ早いですよ！」

イ「自分はいかこれ、数時間以上も試行錯誤を繰り返したのである。それで駄目だったのである。つまり、この扉は今開かないということである。」

ネ「それは・・・、いや、でも・・・。」

キ「『セイシたる者、潔くあれ』って言うだろ。諦めが肝心なんだよ。」

ネ「でも・・・。」

キ「よおし、オレは気持ちを切り替えるぞ。セイシの寿命は七日間と言うから、残りの人生をここでどう過ごすかをオレは考えるぜ！」

ネ 「キリストさん、切り替え早過ぎますよ。ちょっと待ってください。イブイブさん、さっきこの子宮殿の定員が三匹だと言っていましたよね？」

イ 「確かに言った。三匹目、つまりキリストが入って以降、入り口が開かないのであるから、定員は三匹であることが予想されるのである。」

ネ 「この三匹という人数に僕は意味があると思うんです。」

イ 「意味だと？」

ネ 「つまり、三匹でチカラを合わせて扉を開けるんじゃないかって。」

キ 「三匹で？」

イ 「チカラを合わせてだと？」

ネ 「そうです！」

キ 「ぶつ、くつははは！その発想はなかったぜ。ネボスケは面白いことを考えやがるな。」

イ 「ちよつと待つのである。味方同士ならいざ知らず、敵同士でチカラを合わせるなど、自分にご免被るのである。」

ネ 「なんですか？！もはや、敵だ味方だと言っている時ではないでしょ！」

キ 「異なるルーツより生まれし三匹のセイシ達が、ここに来て協力し合うってわけか。くつははは。新しいね、それ。オレは好きよ、そういうの。」

イ 「自分は我が部隊の代表のつもりで、今ここに立っているのである。敵セイシ共とチカラを合わせるなど、死んでいった仲間達が許してくれるはずもないであろう。」

ネ 「イブイブさん！みんなの願いはなんでしたか？！」

イ 「願いだと？それは、人間になることに他ならないのである。」

ネ 「だったら！だったら、今僕らがすべきことは、お互いがみ合うことじゃないはずですよ！」

イ 「ぬっ！」



ネ 「今僕らがすべきことは、なんとしてもこの扉を開けることです！」

キ 「『Yesterday's enemy is a friend today.』ってやつचना。どうよ、イブイブ、やるだけやってみねえか？」

イ 「うぬう……。三匹でどうにかなるものとは思えぬが、悔いを残して朽ち果てるは、自分の望むところではない。やってみようではないか！」

ネ 「よし、絶対に開けてやりましょう！」

キ 「よっしゃあ！ いつちよ、かましてやるぜ！」

イ 「死んでいったみんな、自分に力を！」

ぐおおおおおおおおお！！

三匹は持てるチカラをすべて使って、懸命に扉を押した。しかし、扉はびくともしなかった。

キ 「やっぱ、駄目かよ……。」

イ 「我々は来るタイミングを間違えたのである。よって、この扉は今決して開かれないということである。」

ネ 「ハアハア……。」

キ 「しゃあねえしゃあねえ。さあてと、残りの人生をどう過ごすかな。」

ネ 「……。待つてください。」

イ 「まだ、何か言うのであるか？」

キ 「さすがに、諦め悪いぜ？」

ネ 「今のは、『扉を開けたい』という気持ちが足りていなかったんです。」

キ 「はあ？」

イ 「気持ちだと？気持ちでどうにかなる問題ではないであろう。」

ネ 「僕は子宮殿に来る前、殺されかけました。」

イ 「……仲間割れであるな？」

ネ 「はい。その時、何度も心の中で叫びました。『誰か助けて！』と。」

キ 「それで、助けは来たのかよ？」

ネ 「はい。僕の気持ちが通じて、あるセイシが助けに来てくれました。そのおかげで僕は今ここにいます。」

イ 「それはつまり、テレパシー能力ということであるか？」

ネ 「おそらく、そうなんだと思います。」

イ 「テレパシーは本来、ブロッカーセイシ達が得意とする能力である。エッグゲッターである我々にできるとは到底思えないのであるが……。」

ネ 「テレパシーなんて難しいことは僕にもよくわかりません。ただ、大切なのは『強く思うこと』だと思うのです。」

キ 「強く願えば、通じるってわけか。」

ネ 「さっきのは気持ちが足りていなかったのかもしれないです。」

イ 「気持ちが足りていないと言われてもな……。我々はどうしたらいいのであるか？」

ネ 「僕らの願いは、この扉を開け、玉姫様とお会いし、そして人間になることです。」

キ 「そうだな。」

ネ 「その気持ちを中にいるであろう玉姫様に精一杯飛ばすんです！」

イ 「つまり、心の中で玉姫様へ向けて気持ちを精一杯伝えるということであるな？」

ネ 「そうです。そうすれば絶対に気持ちは通じるはずですよ！」

キ 「……よし、こうなったらとことんお前さんに付き合っやるよ。ただし、これが最後だ。これで駄目なら、ジ・エンドだ。」

ネ 「わかりました。」

キ 「よっしゃ！泣いても笑ってもこれが最後だ。てめえら、死ぬ気で押しやがれ！」

ネ 「そして、玉姫様に僕らの気持ちの強さを精一杯伝えてやりましょう！」

イ 「玉姫様あああつ！！！」

ぐおおおおおおおおおおおおつ！！

うんにゅううううううううううう！！

ふんぐううううううううううう！！

僕らは、扉を懸命に押しながら、心の中で『人間になりたい』という気持ちをまだ見ぬ玉姫様に向けて必死に念じ続けた。それは、決して相容れることのない異なるルーツより生まれし三セイシの気持ちが一いつになった瞬間でもあった。そしてその時！

キ 「！！！」

イ 「！！！」

ネ 「！！！」

三匹は頭の中で、同時にある言葉を聞いたのだ。

？ 「ウフフ。ア・ケ・タ・ゲ・ル。」

その言葉が聞こえた次の瞬間、今までびくとしなかったこの大きな扉が音を立てて開かれていった。

完結編へつづく

## 第四部（完結編）

R 指定

（文中に性的な表現が含まれておりますのでご注意ください）

ネ・・・ネボスケ  
イ・・・イブイブ  
キ・・・キリスト  
じ・・・じい（執事）  
玉・・・玉姫様

キ 「ハアハア、ハア・・・。」  
イ 「・・・。（ごくつ）」  
ネ 「ついに、扉が開かれていく。・・・行きましょう。」

ついに、玉姫様の間へと続く最後の扉が開かれた。

三匹は玉姫様の間を奥へとゆっくり歩いていった。本能のままに生きるセイシであるなら、玉姫様をものにするため、我先にと走り出すと思うかもしれないが、「そのようなはしたないことはできない」とセイシ達に感じさせてしまうほどの厳粛な雰囲気、玉姫様の間には漂っていた。

しばらく進んでいくと、正体不明の何者かが待ちかまえていた。その何者かは僕らセイシというよりもどちらかというと白い悪魔に似た姿形をしていた。

じ 「ようこそおいで下さいました。」

ネ 「あなたは？」

じ 「私めは玉姫様の世話役を仰せつかっている『執事』でございます。ささ、玉姫様がお待ちでございます。こちらへどうぞ。」

その執事に案内され、さらに奥へ進んでいくと、そこには白い悪魔達が左右に列を成し、まるで道を作っているかのように立っていた。

キ 「お、おいおい、まさか襲ってこねえよな？」

じ 「彼らは玉姫様直属の護衛部隊でございます。」

イ 「自分達はここに来るまで、散々あなた方の仲間を殺してきたのである。相当恨みを買っているのではないだろうか？」

じ 「いえいえ。あの戦いは決して抗うことの出来ない『定め』でございます。なのでこちらは恨みなど思っておりません。それにそちらも相当数の犠牲を払われている。・・・『痛み分け』というやつですな。」

ネ 「・・・。」

じ 「この玉姫様の間にたどりついたあなた方は、玉姫様の大切な客人となったのでございます。なのでこちらとしては誠意をもって対応させていただきます。ささ、参りましょう。」

僕らは白い悪魔達が作る道を恐る恐る進んでいった。進んでいくと

そこには、玉座を思わせる巨大な椅子が置かれており、玉姫様らしき人物がちょこんとお座りになっていた。

じ 「玉姫様、連れて参りました。」

玉 「ご苦労であつた。」

僕は誰に教えられるでもなく、玉姫様の前で膝をつき、平伏した。

玉 「苦しゅうない。面を上げい。」

僕は顔を上げ、玉姫様をしっかりと見た。あの、夢にまで見た念願の玉姫様が今、目の前に座っておられるのだ。

イ 「ついに、ここまで来たのであるな。」

キ 「おう、感慨深いことこの上ねえよ。」

ネ 「そうですね。僕も今感動してます。」

玉 「わらわが玉姫じゃ。そち共が、先ほどわらわに向けてテレパシーを送ったのだな？」

ネ 「そ、そうです。通じましたでしょうか？」

玉 「本当に弱々しくではあつたが、届いたぞ。」

ネ 「ふゝ、よかったあ。」

玉 「必死な気持ち伝わってきたのでな、今は扉を開ける気分ではなかったのだが、思わず開けちゃったのだ。」

イ 「やはり当初は開ける気がなかったようであるな。（こそこそ話）」

キ 「まあ結果オーライってやつよ。（こそこそ話）」

玉 「わら、わ、わらわら……」

ネ 「??」

玉 「わら………あーん、もう！やーめた!!」

ネ 「どうなさったのですか?！」

玉 「実はあかし、『わらわは、くじゃ』とかこういうしゃべり方、窮屈でほんとは大っ嫌いなの！」

ネ 「え？」

玉 「じいがこういう風にしゃべった方がいいていうから、我慢してやってたけど、もうやめ。やっぱあかし、普通にしゃべるわ。」

イ 「なんと！」

じ 「ですが玉姫様、そうしますと玉姫様としての格式の高さが薄れてしまわれますよ？」

玉 「あたしはそのままのあたしでいたい。格式なんてどうだっていいわ。」

じ 「うむむ。困りましたな……。」「

キ 「玉姫様の言うとおり。変に格好をつける必要なんてありませんよ。なぜなら、そのままの君が一番素敵だから。」

玉 「うふふ。そうかしら。」

じ 「すみませんが、どさくさに紛れて玉姫様を口説かないで頂けますか？」

キ 「悪い。つい、血が騒ぐんだ。」

玉 「とにかくあたしはやりたいようにやらせてもらっわ。いいわね？」

じ 「……。わかりました。ではそのようにしてやっていきましょう。」

ネ 「僕らセイシなんかよりも玉姫様のほうが本能のままに生きている感じだね。(こそこそ話)」

イ 「それは言えているのである。(こそこそ話)」

玉姫様のご意向で、もう一度最初の対面するところからやり直すこととなった。



じ 「玉姫様、連れて参りました。」

玉 「よっ、お疲れちゃん」

じ 「……………」

平伏する僕ら。

玉 「そんな平伏なんて堅っ苦しいことしないでいいわよ。無礼講といきましょう。あたしが玉姫、よろしくねん」

じ 「……………」

玉 「あなた達がさっきあたしにテレパッてくれたんでしょ？」

ネ 「通じましたか？」

玉 「ビミョー。」

ネ 「え？」

玉 「かろうじてって感じね。あたしのテレパシー能力が高くなかったら、おそらく届いてなかったわよ。あたしに感謝なさい。」

ネ 「ど、どうもありがとうございます。」

玉 「でもね、こう、『必死な強き思い』みたいなものは確かに感じ取ったの。だからね、そんな気分じゃなかったんだけどね、こう、扉をパカッと開けてあげちゃったのよね。」

ネ 「……………」  
「とにかく、僕らの思いが玉姫様を突き動かしたというわけですね。」

玉 「ま、そういうことね。……………」  
「とまあ、こんな感じでやっていくわよ。いいわね？じい。」

じ 「……………」  
「どうぞ、ご自由に。」

イ 「玉姫様がこんなに気さくな方とは予想していなかったのである。」

玉 「ふんふんふん」

じ 「随分ご機嫌でらっしゃいますね、玉姫様。」

玉 「そりやそーよ。だって、異なるルーツより生まれし三セイシがここに揃うなんて、こんなドラマチックな展開は初めてだわ。」  
じ 「確かにおっしゃる通りでございます。通常は考えられない、いえ、常識的に考えてありえない事態でございます。」

玉 「そうね。確かに複数の殿方と同時に関係を持つというのは、一般的に非常識だと非難される行為ね。．．．けど、あたしはありだと思っわ。」

じ 「な、何をおっしゃいますか?!」

玉 「だって、『より優秀なセイシ』と融合を果たすことがあたしの本能なもの。」

じ 「それは、そうですが．．．。」

玉 「より優秀なセイシを見つけるためには、より多くの、そしてタイプの異なる様々なセイシ達を競わせること。それしかないわ。」

じ 「それは．．．一理ありますが．．．。」

玉 「つまり、常識に囚われない本能的な行動によって、まさにあたしが望む理想的な状況が生まれたの。それが、今よ。」

じ 「．．．全く、そのような斬新的な発想には、私めはついていきませんな。」

玉 「さてと、それではそろそろ始めましょ。」

ネ 「始めるって、僕らはいったい何をすればいいのでしょうか？」

玉 「あなた達はここにたどり着くまで、幾多の試練を乗り越えてきたわよね。」

イ 「長く、辛い道のりだったのである。」

玉 「灼熱地獄から始まり、そして我が下僕『ルーケサイト』との戦い、」

キ 「まさかの敵セイシとの遭遇、そして戦闘、」

ネ 「仲間割れもありました。」

玉 「幾多の試練を乗り越えてきたあなた達にとって最後の試練よ。」

「最後の試練とは？」

玉 「最後の試練とは、『あたしに選ばれること』に他ならないわ。

ネ 「！」

キ 「当然そうなるわな。」

玉 「このあたしを『その気にさせてみなさい』ってことよ。」

じ 「つまりは、『アピール合戦』をしてもらおうと、そういうわけでございます。」

キ 「ほっほー。そういうことならこの勝負、いただきだな！」

イ 「何を?!」

キ 「遅らせばながら、自己紹介をさせていただきます。オレの名前は、キリストと申します。以後お見知りおきを。」

イ 「そ、それなら自分も。自分はイブイブという名であります。」

ネ 「ぼ、僕はネボスケと言います。」

玉 「ネボスケ？変わった名前ね。」

キ 「そいつは寝坊したからそんな名前をつけられたダッサいやつなんすよ。それよりもね玉姫様、なぜオレがキリストを名乗っているかわかりますか？」

玉 「ええ、なんとなくわかるわ。」

キ 「さすが聡明な玉姫様。察しがいい。なぜキリストを名乗っているかと言えば、それはオレがクリスマスの夜に送り込まれたセイシだからに他なりません。」

玉 「そうなるわね。」

キ 「クリスマスと言えば、恋人達にとって最も大切な一日。そのクリスマスの夜に男と女はロマンチックなメイクラブをし、そしてこのオレが送り込まれた。・・・これだけ言えば、聡明な玉姫様ならご理解いただけますよね？」

玉 「そうね。確かに『クリスマスメイクラブ』はポイント高いわね。」

キ 「もう、決まりつしょ。」

イ 「ちよつと待つのである！確かにイブイブ、つまり23日とクリスマスとの意味合いを比較すれば、クリスマスのほうが重要な意味合いを持つことは、この際認めるところである。」

キ 「だろ、なら、」

イ 「いや、待つのである！しかし、もしイブイブのメイククラブで我らセイシの誰かが玉姫様と早々に融合を果たしてしまっていたのなら、どうなるのであるか？」

キ 「うっ！」

イ 「そうしたら、クリスマスもクソもないのである。つまり、一番重要なことはメイククラブの『順番』なのである！！」

キ 「うがっ！！」

イ 「そして、順番で言えば自分、イブイブがこの三匹の中では最初なのである！！」

キ 「くそ、痛いところを突きやがって……。」

イ 「どうであるか？玉姫様。」

玉 「そうね、確かにあなたの言うとおりだね。」

イ 「これは自分で決まりであるな。」

玉 「ねえ、ネボスケ、あなたは何か言うことないの？」

ネ 「え、ば、僕はクリスマスイブ、つまり24日に送り込まれたセイシなので、意味合いで言えばクリスマスに劣り、そして順番で言えば23日のイブイブに劣ります……。」

キ 「相変わらずダツサイな。とりあえずお前さんの可能性は消えたな。あっち行って遊んでろ、な？」

ネ 「……。」

玉 「……。」

キ 「しかしね、順番とは言っても、現実問題として今現在に至るまで、どのセイシも玉姫様と融合を果たせていないわけで、その時点で順番の重要性は消滅なんじゃねえの？」

イ 「たまたま、融合が果たされなかっただけである。女は我らの

セイシが人間になることを望んだからこそ、最初にメイクラブをしたのである。」

キ「いいや、何かの手違いで事故的に送り込まれたという可能性もあるんじゃないか？」

イ「何を言うのであるか?! 我らが愛のないメイクラブで送り込まれたセイシであるとしても?!」

キ「ああそうさ。本命はやはりクリスマスのオレ達で、お前さんらとはお遊びだ。」

イ「お遊びだと・・・?!」

キ「お遊びで戯れていたが、事故的に『送り込まれてしまった』。そういうことなんじゃないの？」

イ「キリスト、お前、さっきから言わせておけば、」

玉「待ちなさい。」

イ「!」

玉「その点については、もうわかったわ。今度はもっと他のことでアピールしてもらおうかしら。」

イ「くっ……。」

玉「そうねえ、じゃあ、次は夢でも語ってもらおうかしら。」

イ「夢……でありますか？」

じ「つまり、人間になったらどんなことをしたいかってことですな。」

イ「自分は世界を飛び回って、いろいろな世界の観光名所を見て回りたいと考えているのであります。」

玉「へえ、旅行が好きなのね。」

キ「ちっちゃい夢なこと。」

イ「何を?!」

キ「玉姫様、オレの夢はもっとスケールがでかいですよ。」

玉「どんな夢かしら？」

キ「オレの夢は宇宙飛行士になって、火星に行つて、それで火星人と友達になることだぜ。イエー!」

玉 「うふふ。確かにスケールの大きな夢だこと。でも火星入ってほんとにいるのかしらね。」

キ 「いますとも！飽くなき探求心！これぞ、男のロマンというやつですよ、玉姫様。」

玉 「じゃあ次はネボスケの番ね。あなたの夢を聞かせて。」

ネ 「僕の、夢ですか……。僕の夢は……。、」

イ 「。。。。。」

キ 「。。。。。」

ネ 「僕には、まだ夢がありません。」

玉 「そうなの。。。？」

キ 「くつははは。まあいいじゃねえすか、玉姫様。こいつの可能性はもう消えてるわけだし。ダサ過ぎて、もはや聞いてらんねえ。」

イ 「ネボスケ、本当に君には夢がないのか？」

ネ 「。。。。僕には鶴亀という苦楽を共にしたセイシがいました。」

キ 「おいおい、何の話だよ？」

玉 「その鶴亀というセイシがどうしたの？」

ネ 「鶴亀は僕の命の恩人です。彼にはとても具体的な夢があったのです。」

キ 「おいおい、他セイシの夢の話かよ。。。。。」

玉 「その鶴亀の夢、聞かせてもらえる？」

ネ 「はい。鶴亀の夢は大女優になることでした。」

キ 「大女優だと？」

イ 「大女優。。。であるか。」

玉 「うふふ。面白いじゃない？」

ネ 「大女優になるためには、まずカリスマ読者モデルになる必要があります。」

玉 「うんうん、読モね。」

ネ 「そうです。それで女子中高生の憧れの的になります。」

イ 「カリスマとはそういうものであるからな。」

ネ 「そうしたら清纯派女優として鮮烈デビュー！」

玉 「清纯派なのね！」

ネ 「新人賞を総なめ！」

キ 「そんなうまいこといくかよ。」

ネ 「本能のままに歌手活動をしたりもします！」

イ 「それはマルチな才能であるな。」

ネ 「7週連続オリコン1位！」

キ 「7週連続で。浜崎あゆみでも無理だが。」

ネ 「その後、きりのいいところで仕事ストップ！」

玉 「え、どうして？」

ネ 「結婚するからです！」

イ 「なんと?! 相手は誰であるか？」

ネ 「クリエイターです! 理由は、一番本能のままに生きてそんな気がするからです! それで、あとは……、」

キ 「……おい、ネボスケ。お前さんの目から変な液体が流れ出てるぞ。大丈夫かよ？」

ネ 「え、あ、いつの間に。これは……これは、涙と言われるもので、人間の世界で最も尊いとされているものです。」

玉 「涙……?」

キ 「まだ人間でもねえお前さんが、なんでそんなもんを流すんだ？」

ネ 「僕にもわかりません! ただ、ただこんなに具体的な夢を思い描いていた鶴亀が、何の夢も持っていない僕なんかのために死んでしまったその無念と、自分の不甲斐なさを思うと涙が止まらないのです!!」

じ 「た、玉姫様、どうなさいました?!」

ネ 「え？」

玉 「わからないの。ネボスケの涙を見ていたら、急に目頭が熱くなってきた……。これが、涙なのね。」

キ 「おいおい、涙っていったい何なんだよ？」

イ 「自分にも理解不能なのである。」

ネ 「玉姫様……。」

玉 「涙止まらないじゃない。ネボスケ……どうしてくれるのよ。ぐすんっ。」

ネ 「……玉姫様。僕は今、ようやく夢を見つけることが出来ました。」

玉 「え？」

ネ 「僕は……僕は、鶴亀の夢を引き継いで大女優になる！それが僕の夢です！！」

玉 「……それでいいの？」

ネ 「はい！僕の本能が言っているのです。鶴亀の夢を引き継ぎたいと！」

じ 「ちよっとお待ち下さい。ネボスケさんは私めが見たところ、オトコセイシであるとお見受けいたしますが、その場合、女優じゃなくて、男優になるのでは？」

ネ 「いえ、僕はあくまで大女優になるのです。」

じ 「いえ、ですから、ネボスケさんはオトコセイシで……、」

ネ 「男に生まれたら、性転換手術をして女になる！」

じ 「！！」

ネ 「……それだけのことです。」

じ 「な、なんと、そこまで考えていらしたとは……恐れ入りました。」

「性転換手術をして女になる！」という僕の衝撃発言が飛び出した後、場はしばらく沈黙に包まれた。そしてその沈黙を破って、玉姫様が言葉を発した。

玉 「あたし、決めたわ。」



じ 「左様でございますか。それで、どのセイシになさるのですか？」  
イ 「もちろん、この自分でありましょう？」  
玉 「……うーん、世界中を旅行するのも悪くないと思ったわ。」  
イ 「そうでありましょう！」  
玉 「でもね、よく考えたらあたし、根っからの『出不精』なのよね。」  
イ 「うがっ！」  
玉 「だからごめんなさい。」  
キ 「くっははは。残念だったな、イブイブ。……ということつまり、このオレで決まりってことですよね！」  
玉 「うふふ。」  
キ 「ひやつほーい！」  
玉 「あなた、あたしの話、聞いてなかったの？」  
キ 「は？」  
玉 「あたしは根っからの出不精だと言ったでしょ。」  
キ 「え、ええ、それは聞きましたか……。」  
玉 「つまり、宇宙なんて、もつてのほかよ。」  
キ 「！！（がびーん）」  
じ 「玉姫様、ということは……。」  
玉 「ええ、あたしはネボスケに決めたわ。」  
ネ 「え、ぼ……僕？」  
キ 「オウマイガ。こんなダサイセイシのどこがいいんすか?!」  
玉 「ネボスケの話を聞いて、あたしも大女優になってみたくなつたの。それだけのことよ。」  
キ 「ですがね、大女優になるという夢は元々ネボスケの夢ではない! 鶴亀つてやつの夢だったんでしょ?!」  
ネ 「……。」  
キ 「他セイシの夢をさも自分の夢であるかのように語り、そして

玉姫様の気を惹くなど、セイシの道から外れた外道な行為だ！」

玉 「それは違うわ。」

キ 「え？」

玉 「友の果たせなかった夢を叶えてあげたいというこの気持ち。これは自己を犠牲にしても他者を思いやるという尊い感情よ。」

キ 「うつ・・・！しかし、それは本能のままに生きるオレらセイシにとつてあるまじき思考！」

玉 「確かにそうね。通常のセイシの発想ではあり得ない。・・・でもあたしはネボスケのそんなところに惹かれたの。」

キ 「そ、そんなあ。そ、そいつは出来損ないのセイシなんすよ？！」

じ 「キリストさん、玉姫様は一度決められたことを変えるようなお方ではございません。」

玉 「そうよ。あたしに二言はないわ。大人しく下がりなさいな。」

キ 「納得できねえよ。」

玉 「さあネボスケ、こちらにいらっしやい。」

ネ 「はい。」

キ 「うわゝん、玉姫様あゝ。」

イ 「キリスト、往生際が悪いぞ。『セイシたる者、潔くあれ』であらう？」

キ 「ぢぎしよ。お前さんは悔しくないのかよ?!」

イ 「もちろん悔しかったのである。・・・が、今は祝福したい気持ちである。」

キ 「あ？祝福だあ?!・・・お前さんも十分変わりもんのセイシだぜ。まったく。」

イ 「我々にはない何かネボスケにはあつたのであらう。そして玉姫様はそれを感じ取つたのであらうな。」

ネ 「あ！」

玉 「どうしたの？」

ネ 「あるセイシから託されたこの指輪を玉姫様に渡すのを、すっかり忘れていました。」

玉 「あら、綺麗な指輪ね。」

ネ 「今更ですが、受け取って頂けますか？」

玉 「うふふ。あなた、馬鹿ね。さつさとこの指輪を渡していれば、簡単にあたしのハートを射止められていたのに。」

ネ 「そうですね。僕は本当に馬鹿です……。」

玉 「……なんてね、嘘よ。」

ネ 「え？」

玉 「こんな指輪で射止められる程、あたしのハートは単純じゃないわ。」

ネ 「え、え？」

玉 「むしろ、逆ね。こんな指輪であたしの気を惹こうなんてしてたら、今頃あなたを選んでいなかったわ。」

ネ 「それは、あぶないところでした……。」

玉 「うふふ。うっかり者な自分の性格に救われたわね。」

ネ 「じゃあ、この指輪は……、」

玉 「そうねえ、でもせっかくだからありがたく頂戴しておくわ。」

ネ 「玉姫様、意外とちゃっかりされているんですね。」

玉 「まあ！うっかり者のあなたに言われたくないわ。うふふ。」

じ 「それでは、これから『融合の儀式』を始めさせていただきます。」

ネ 「……。」

玉 「……。」

じ 「……と、その前に、もう一度お二方の『覚悟の程』を確認させていただきます。」

玉 「いいわ。」

じ 「ネボスケさんはここに至るまで、数々の試練を乗り越えて参りましたが、これは決してゴールではございません。新たな試練へのスタートなのでございます。」

ネ 「はい。」

じ 「玉姫様と融合を果たしたからと言って、必ず無事に人間になれるとは限りません。『死産』という形で生涯を閉じることもございます。」

玉 「そうね。」

じ 「また、無事人間として産まれることができたとしても、親によつては育児放棄をされるかもしれませんし、また、虐待を受けるやもしれません。」

玉 「負けないわ。」

じ 「保育園は待機児童で溢れ、なかなか入園できないかもしれませんし、小学校に上がれば上履きを隠されていじめられたり、中学校に上がれば好きな子に告白した時、フラれてショックを受けることもあるやもしれません。」

ネ 「上履きを？」

じ 「社会人になつても、不景気で正社員になれないかもしれませんし、また・・・、」

玉 「じい。もういいわ。」

じ 「・・・左様でございますか。」

玉 「それにあたし達は大女優になるんですもん。」

じ 「そうでございますね。その点についても言っておかなければなりません。男ながらに大女優を目指すということは、世間から好奇の目で見られ続けるイバラの人生を送るということでございます。その覚悟はありますか？」

玉 「承知の上よ！！」

ネ 「僕は・・・本能のままに生きるだけです！！」

じ 「左様でございますか。・・・承知致しました。それでは、融合の儀式を始めるとしましょう。」

僕と玉姫様は、『受精膜』と呼ばれる、誰にも破ることの出来ない透明な膜にすっぽりと覆われた。もはや、僕と玉姫様の融合を邪魔できる者は誰もいなくなった。玉姫様の間には、護衛部隊の「玉姫様、万歳——！！」という声が響き渡っていた。

玉 「ねえ、ネボスケ。」

ネ 「うん？」

玉 「ふふ〜ん 新人賞、総なめにしよーね。」

ネ 「うん、総なめにしよう！」

玉 「7週連続オリコン1位も獲るんだよ？」

ネ 「もちろん！したら、クリエーターと結婚さ。」

玉 「ふふふ〜ん ……じゃあ、おいで。あたしの中へ。」

BGM：マライア・キャリー「恋人たちのクリスマス」

こうして、オカマの男性が生まれてくる

世界中すべてのオカマ達に  
メリークリスマス

F  
i  
n  
.

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5186p/>

---

ドラマチック受精

2010年12月25日20時27分発行